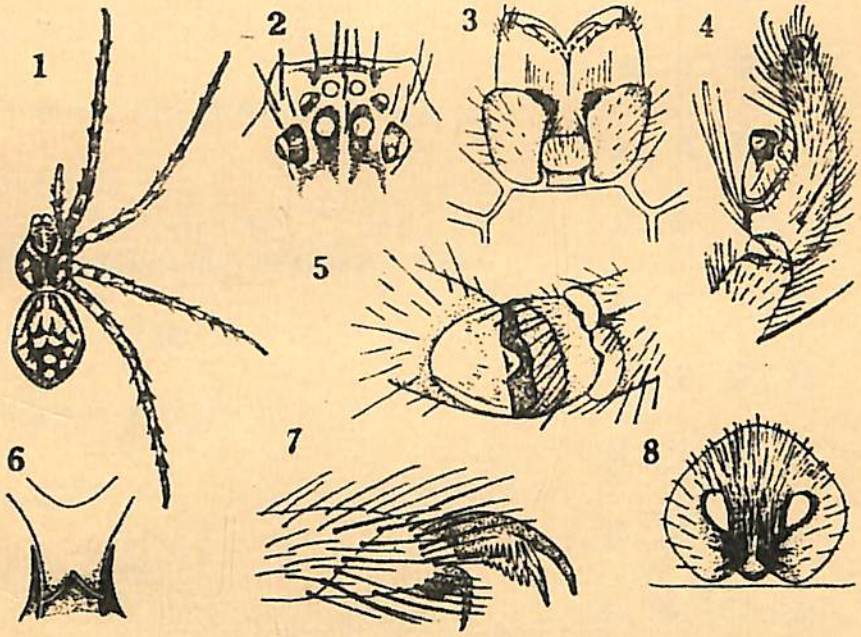
しのびぐも

第 10 号



Cispius orientalis YAGINUMA

1982

三重クモ談話会

1983.5.27

しのびぐも

第 10 号
1 9 8 2

「しのびぐも」第10号によせて	太田定浩	1
三重クモ談話会十周年によせて	橋本理市	2
三重クモ談話会創立10周年を祝して	須賀瑛文	3
おもいで	孫福正	4
三重県のおもなクモ数種について	八木沼健夫	5
クモ類への関心	千国安之輔	10
最近の活動内容から	松本誠治	12
南島町にてムツトゲイセキグモを採る	貝発憲治	13
神島のクモ	貝発憲治	15
談話会図書		17
昭和57年度決算報告		18
会員名簿		19
しのびぐも総目録（第1号～第10号）		20

三重クモ談話会

表　紙　説　明

Cispius orientalis YAGINUMA

シノビグモ（キシダグモ科）

1965年5月4日、三重県、三重大学平倉演習林（一志郡美杉村川上）にて、橋本理市氏採集。
新種として記載された。
図は、八木沼健夫氏の御厚意により、ACTA ARACHNOLOGICA Vol. 20 No.2 より転写したもの。

1. Dorsal view (♀)
2. Eye area (♀)
3. Mouth part (♀)
4. Palp (♂)
5. Trochanter (♀)
6. Pedicel (♀)
7. Onychium and claws (♀)
8. Epigynum (♀)

「しのびぐも」第１０号によせて

太田　定浩

昭和４８年５月２０日、伊勢市駅前の若草食堂の２階で、八木沼、西川の両先生をはじめ、関西在住の学会の方々数名の御出席を得て開かれた、第７回東亜蜘蛛学会関西支部例会の席で、「三重クモ談話会」がここの声をあげてから丁度１０周年になります。当時の会員数は、県外在住の４名を含めて１７名と１団体。次の年の５月１５日にこの『しのびぐも』第１号は世にでました。会員数の少ない会ゆえに、いろいろ困難もありましたが、どうにか年１回発行を守り続け、ここに１０号を出すことになりました。その間多くの会員の方々に支えられて、充実したとまではいかなくても、内容のある談話会の機関誌として号を重ねることができましたことはご同慶の至りであります。現在会員数は２８名と当初よりかなり増えておりますが、県内の会員数は１４名に過ぎず、多少の入れ替わりはありましたが、ほとんど増えていないということが、気がかりであり残念にも思います。もともとこの会は「三重県におけるクモ類の研究の発展と会員相互の交流を目的」としてつくられたものですから、三重県に住む者が中心になって会の活動を盛りあげていかなくてはならないと考えています。

そこで、１０周年を迎えて、この会がさらに大きく発展していくための当面の課題として二つ考えました。まず、県内会員の増加をはかること。そのための手だてをどうしたらいいか。もう一つは、県内の分布資料や観察記録などを充実していくこと。本誌第７号の松本誠治氏の論文にのせられている「５分ごとに区切った経緯の網目によるクモ類採集地」の図をみると、本県内にはまだまだ多くの空白部分が残されていることがよくわかります。会員の拡大もはかるこれら空白地での調査観察会等の行事を計画実施する中で、資料を充実していかなくてはならないと考えています。

最後に、本会の事務局を担当している貝発さんは、会の設立以来、献身的にこの会のために努力していただき、年１回とはいえ「しのびぐも」の印刷原稿書き、印刷などを一手に引き受けてやっていただいております。特に９号からは和文タイプを自費購入され、自分で打って本誌の体裁を整えるとともに一段と読みやすいものにしていただきました。片手間の仕事にしては立派なもので、感謝の意をこめて一言つけ加えさせていただきました。

三重クモ談話会十周年によせて

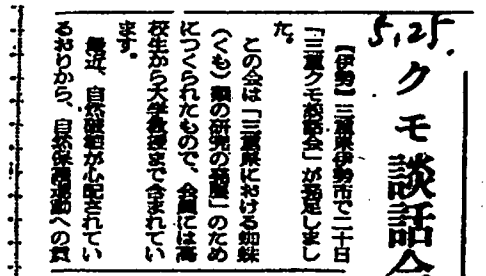
橋　本　理　市
（伊勢工業高校）

三重クモ談話会が発足して１０年をむかえる。１０年ひと昔というが、生れたばかりの赤ん坊が、小学校4年生になる歳月である。ふりかえってこの１０年間、なにをしてきたか自らに問うとまったく赤面の至りである。

三重にクモ談話会をつくろうという話が3人の県内のクモ学会員の間で出たのは１９７２年の後半のことであったと思う。私のファイルをくってみると、当時はまだコピイ器もなかったのか、私がカーボン紙で複写をとった草案を１９７２年１１月7日付で太田、貝発両先生に送っている。約半年間の準備期間を経て、翌年5月２０日に、伊勢の「若草食堂」での発会式にこぎつけることができた。

発会の日の私の日記にはつぎのように書かれている。「5月２０日、晴。クモ談話会発会式。準備のため早く出かける。カゼ気ぬけず。貝発氏と2人で準備と打合せ。定刻に大阪勢来る。全部で１１人。三重県4人、太田、貝発先生と私、四日市高2年生の生徒。大阪、京都、和歌山から7人。若草食堂は日曜で昼食をする人が大広間をとったので、中間（の部屋）しかなかったので、ややきゅうくつであった。が、まあとに角、『三重クモ談話会』は発足した。これからが大変である。こんしん会をして7時前に終了。貝発さんは明後日から宇仁田病院へ手術のため入院の予定。約1カ月はかかるという。

この談話会の発足については、どこの新聞社もとりあげてはくれなかったが、「赤旗」だけは趣旨を理解してくれ、5月２５日付で右のような記事をのせてくれた。その後、私の方は研究活動に専念することがあまりできず、機関誌「しのびぐも」にもレポートをあまり出さなかった。事務局長の貝発先生の忍耐づよい誠意ある活動がなかったら、このクモ談話会もつづかなかっただろうし、「しのびぐも」も、年1回の発行を維持できなかったかもしれない。



5.25.

クモ談話会発足　三重

【伊勢】三重県伊勢市で二十日「三重クモ談話会」が発足しました。

この会は「三重県における蜘蛛（くも）類の研究の発展」のためにつくられたもので、会員には高校生から大学教授まで含まれています。

最近、自然破壊が心配されているおりから、自然保護運動への貢献と、自然科学研究の大衆的発展のために同会の活躍が注目されます。

会合には、三重クモ学会（会員約三百五十人）の八木沼信夫会長も出席して祝辞をのべたあと、「最近のクモ学の情勢とのこされている問題」について報告をおこないました。

上野高校時代は、生物を教え、生物クラブの顧問をし、クラブ員の中にも、クモの研究に専念する生徒もいたので、休みの日には、ほとんどといってよいくらい採集に出ていた。三重生物の研究発表会にも、クモをテーマにしたレポートを持っていくこともできた。しかし、志摩高校にかわり、科目が英語にかわってから、研究の主力は、英語教育の方にかたむき、生物クラブも存在しなかったこともあり、採集に出る機会を次第に失っていった。加えて、教組の仕事や、英語教育研究会の仕事などが重なり、次第にクモから遠ざかっていった。

この１０年間に、２度ＮＨＫから番組製作への協力依頼があり、その機会に、あらためて取材の対象を観察しなおしたりしたことはあったが、それ以後も、自然にめぐまれた中に生活していながら、その条件を十分生かし切れなかったことはくやまれる。１０年を記念して、再度初心にたちかえって、研究活動を回復しなければと、心に言いきかせているこのごろである。

(1982年5月5日)

三重クモ談話会創立１０周年を祝して

須　賀　瑛　文

(中部蜘蛛懇談会会員)

“しのびぐも”１０号の発刊おめでとうございます。

会員・会費の少ない地方の会で、この１０号発刊までのご苦労、並大抵のことではなかったかと推察いたします。当地名古屋の中部蜘蛛懇談会会報も、やっと第１７号の編集を終えることができました。お互いに大変ですが、隣県の同好会ゆえ、今後ともご協力くださるよう念願してやみません。

おもいで

孫福　正

私は昭和11年2月9日付のハガキで、植村利夫先生からコケの文献についての手紙のかたわら、誰かクモをやってくれる人はいないかという依頼を受けたが、当時クモの研究家は県内ではまだ聞いたことがないし、またやってくれそうな人もいないので、それなら自分がやってみようかと思い、湯原清次氏の「蜘蛛の研究」を求めて勉強をはじめた。しかし、どんなにして採集するとよいのやらも知らず、まず家の中からはじめ、便所の壁と柱の間からチリグモを見つけたり、納屋の中を懐中電灯でしらべたり、オニグモの巣の張り方や、ジョロウグモの交尾の観察に興じたものである。ただ、クモは一緒にすると、皆食い合いをしてだめになることだけは知っていたので、生きたままを管びんに入れ、一匹ずつ綿でしきりをしたものである。そして、管びんバンドを腹に巻き、採集に出かけ、鉄砲も持っておらぬのに、猟師とまちがえられ、苦笑したことが何遍かあった。飯南郡の局ケ岳の頂上（1000米）で、大形の画ビン位もあるダニを採ったこともあるし、北勢の野登山の頂上で、※カラスグモを採って万歳をいったことも覚えている。更に、二見町の今一色の松並木道を歩いていて、幹上のずっと高い所で、ハエトリグモが移動するのがふと目にとまり、我ながらびっくりしたこともある。どうもホルマリンを使うのが不得手であるし、殺生ということが苦になるので、二年足らずで中止して終った。そのあと、恩師の槌賀先生にすすめ、植村先生を紹介してほっとした。しかし、その後、私は郷土のクモについては、折にふれ調べていた。行水をしていてワスレナグモの巣をみつけたり、五十鈴川流域のシイの葉裏で、カニの甲羅のように硬いガザミグモ一種？をとり、珍しいので彩色絵が残してある。

以上、当時のおもいでを記し、三重クモ談話会の発展を祈願して筆をおく。

（※ *Cyclosa atrata* BOS. et STR.　　カラスコミグモ）

三重県のおもなクモ数種について

八　木　沼　健　夫
（追手門学院大学生物学研究室）

三重蜘蛛談話会の創立１０周年をお祝い申し上げます。

その記念号に何か記事をとの依頼をうけましたので、三重県のおもなクモについて未発表の事項もおりまぜて、書かせていただきます。

１．クロマルイソウロウグモ　*Spheropistha melanosoma* YAGINUMA

既知産地は高知県（中平清氏）、広島県（大志茂善平氏）でいずれも♀であったが、続いて三重県で太田定浩氏が貴重な♂を採集された。その後、奄美大島（大河内哲二氏）でも♀が発見された。

本種は発表以来、その属について論議が続き、最近やっと八木沼の発表通りに落ちついた。このクモを発表直後、アメリカのＬｅｖｉ氏から、標本を見たいから貸してほしいとの依頼があったので送ったところ、Ｌｅｖｉ氏はイソウロウグモのなかまでなく、カラカラグモ科のものであると主張しつづけた。発表後にとれた♂を検した結果によってもヒメグモ科のような気がするので彼に見せたところ、こんどはカラカラグモ科に似ているがヨリメグモ科のような気もする。しかし、ヒメグモ科とも考えられるというあいまいな返事が来た。彼はその後もヒメグモ科としては認めず、彼の論文にはカラカラグモ科として扱っていた。このいきさつを知ったイタリアのＢｒｉｇｎｏｌｉ氏が標本の再検討をしたいと言って来たので、Ｌｅｖｉ氏に貸した♀♂標本を送ったところ、Ｌｅｖｉ氏の見解はまちがいで八木沼のいう通りヒメグモ科のものとして認めるべきとし、*Spheropistha melanosoma* が最初の発表通りの結果となった。

ごく稀少な例ではあるが、オオヒメグモの網に居候するので、生態からもイソウロウグモのグループであるし、♂の触肢の構造は明らかにヒメグモ科を示している。

三重県での産地：員弁郡（イナベ）大安町宇賀渕、19－Ⅷ－1962. ♂、太田定浩氏採。

〔文献〕Yaginuma, T. , 1957. Acta arachnol. , 15 (1) : 11－16
Levi, H. W. d L. R. Levi, 1962. Mus. comp. Zool. Harvard, 127 : 3－71.
Brignoli, P. M. , 1981. Acta arachnol. , 30 (1) : 9－19

2. スズカホラヒメグモ　*Nesticus suzuka* YAGINUMA

三重県の多くの人々により採集されていたが、のち大阪の西川喜朗氏、野戸

章氏により滋賀県や岐阜県の洞窟内外から多数採集された。鈴鹿山系の両側に分布するホラヒメグモで分布域はかなり広い。三重県では篠立の風穴から知られているが、調査が進めば平地からも見つかると思われる。

三重県での産地：員弁郡藤原町篠立、篠立の風穴、15－Ⅶ－1978.♂(Holotype)、垂水有三氏採：♀(Paratype)、西川喜朗氏採：その他♂♀幼生は三重県の多くの人々により採集されている。

〔文献〕Yaginuma, T., 1979. Fac. Let. Rev. Otemon Gakuin Univ., (13) : 255－287.

3. シュウレイホラヒメグモ　*Nesticus shureiensis* YAGINUMA

今のところ三重県特産のホラヒメグモで洞窟産で洞外からは未発見。古くから三重の人々により、鷲嶺の水穴から採集されてきたが、いずれも♀か、♂幼生であったため、長い間 *Nesticus* sp. とされていた。その後、野戸章氏や垂水有三氏らは採集した♂幼生を飼育によって成体に仕上げ、初めて♂の特徴を知ることができたので上記学名をつけて発表した。♂の触肢の構造はスズカホラヒメグモ（*Nesticus suzuka* YAGINUMA）、グジョウホラヒメグモ（*N. gujoensis* Y.）、ミヤマホラヒメグモ（*N. masudai* Y.）、オンタケホラヒメグモ（仮称）（*N.* sp.）などと相通じるものがあり、一連の一つのグループをなすものである。

三重県での産地：伊勢市矢持町鷲嶺の水穴、6－Ⅲ－1962、♀、5♂y、橋本理市氏採：28－Ⅴ－1963、2♀、♀y、大竹勝氏採：6－Ⅲ－1976、2♀、市橋甫氏採：25－Ⅺ－1979、3♂、♀、野戸章氏、垂水有三氏採。

〔文献〕Yaginuma, T., 1980. J. speleol. Soc. Japan, 5 : 34－37

4. ヤマトホラヒメグモ　*Nesticus yamato* YAGINUMA

奈良県特産と思われていたが、最近和歌山県や三重県からも採集された。スズカホラヒメグモと分布圏は重なっていないが、広範囲（洞内外）に分布する。♂の触肢の形態が特異である。

三重県での産地：度会郡阿曽の風穴、28－Ⅸ－1970、8♀、7y（飼育して成体になる）、垂水有三氏、野戸章氏、西川喜朗氏ほか採。

〔文献〕Yaginuma, T., 1979. Fac. Let. Rev. Otemon Gakuin Univ., (13) : 255－287.

八木沼健夫, 1980. 追大文紀, (14) : 241－250

垂水有三, 1981. Atypus, (78) : 13－16

5. ムツトゲイセキグモ　*Ordgarius sexspinosus* (THORELL)

このクモが初めてとれたのは昭和26年8月、当時大阪市立自然科学博物館で第2回の北山峡の科学調査がおこなわれたときである。マメイタイセキグモに似ているが腹部の形態がまったくちがっているし、頭胸部背面には小さい6本の突起がある。いろんな文献に当ってみたがわからない。ある時、岸田久吉先生が関西に来られたので、このクモを見てもらったところ、即座に「これはイセキグモ*Ordgarius isekii*というのだ。珍しいものがとれたね。」と喜んで下さった。しかし、イセキグモの名はLansaniaに出ていたことがあるが、記載はどこにもない。そこで、丹念に文献を調べた結果、すでに外国で記載されている*Ordgarius sexspinosus*であることがわかり、ムツトゲイセキグモと命名した。岸田先生によれば、「最初（1912）井関尊二氏が発見されたのでイセキグモとした。しかしその後、東京・神奈川・長野・京都・愛媛・大分からもとれたが、ほとんどイチジクの木であった。」とのことである。私のとったのはアラカシの葉うらであった。最近ではもっとほかの地方でもとれ出した。まだ珍蛛の仲間に入れておいてよいであろう。

三重県での産地：熊野市粉所（コドコロ）、3—Ⅷ—1951、♀、八木沼採。

〔文献〕八木沼健夫，1958. 兵庫生物，3 (4)：1—3

6. キマダラオニグモ　*Zilla flavomaculata* YAGINUMA (→*Zilla sachalinensis* SAITO)

本種も前述の第2回北山峡調査中に得られたもので、上記学名を与えたが、のちに各地から採集され、多くの個体を見ているうちに、どうもカラフトオニグモ（*Zilla sachalinensis*）と色彩や斑紋でははっきり区別がつくのに、形態的なちがいを見出だせず疑問に思っていた。たまたま山形県（佐藤智子氏）のクモを同定したとき、両者の色彩の中間型を見出し、さらに両者の♂を見るに及んで、意を決してカラフトオニグモの色彩変異とみなしたのである。三重で発見以来、兵庫県・大阪府ほかでも見つかっている。

三重県での産地：熊野市と紀和町の境にある大人平山（オビトダイラヤマ）の山麓で、熊野市よりである。2—Ⅷ—1951、♀、八木沼採。

〔文献〕八木沼健夫，1955. Acta arachnol.，14 (1)：15—24. pls. 1—2.

7. キヌアシナガグモ　*Tetragnatha lauta* YAGINUMA

本種も北山峡第2回調査中に得られたもので、山麓の日当りのよい場所に、極めて細い糸でできている目の荒い網を張っていた。網は水平でなく、むしろ垂直に近かった。時どき他の地方から報告があるが、発見例は少ない。日本の

アシナガグモは大熊千代子氏により少しずつ学名が変更されているが、本種は今のところ生きている。

三重県での産地：熊野市大人平山山麓、北山川上流の川沿い、2－Ⅷ－1954、♀♂、八木沼採。

〔文献〕 Yaginuma, T. , 1959. Bull. Osaka Mus. Nat. Hist. , (11) : 11－14. pl. 6.

8. シノビグモ　*Cispius orientalis* YAGINUMA

橋本理市氏が三重県で発見されたクモで、わが国では初めての属で新種となった。属は*Nilus*と*Cispius*の中間的な特徴を持っているので、これに対し新属を考えたが、種が一種のみで新属とすることをためらい、より近い*Cispius*として扱った。三重県で発見後、ＪＩＢＰ－ＣＴＳ (5～14－Ⅷ－1969) の調査の際、西川喜朗氏らが石鎚山 (650－1600m alt.) で多数、また穴神洞でも採集された。

三重県での産地：一志郡美杉村川上、三重大学演習林、4－Ⅴ－1965、♀♂、橋本理市氏採。

〔文献〕 八木沼健夫, 1967. Acta arachnol. , 20 (2) : 50－64

八木沼健夫・西川喜朗, 1970. Annual Report of ＪＩＢＰ－ＣＴＳ for the fiscal year of 1969. pp. 63－77

9. アシダカグモ　*Heteropoda venatoria* (LINNAEUS) の色彩変異

あとにもさきにも三重県だけで発見されたアシダカグモの珍奇な変異である。背面左半分は濃黒褐色、右半分は淡褐色で、正中線でくっきり分けられている。いわゆるツートンカラーのクモである。腹面も同じように左右はっきりわけられている。昭和45年9月、北牟婁郡紀伊長島町で発見された。発見者は長島町呼崎（ヨビサキ）の東伸三氏で、当時長島高校の貝発憲治氏を通じて私のもとに届けられた。小形のものでは外国にもごく少数例があるが、アシダカグモのように大きい個体では世界で初めてである。私は当時、単なる色彩変異で、色素遺伝子を含む左右の染色体の不当配分であると思われると発表したが、その後の観察では、色彩だけでなく、左右の歩脚の長さもちがっており、一種の性モザイクではないかと思って今なお調べている。（標本は東亜蜘蛛学会で保管）

〔備考〕 上記の北山峡産のタイプ標本は大阪市立自然史博物館に保管。（現在整理のため東亜蜘蛛学会で預っている。）その他の記載に用いたタイプ標本は東亜蜘蛛学会に保管。

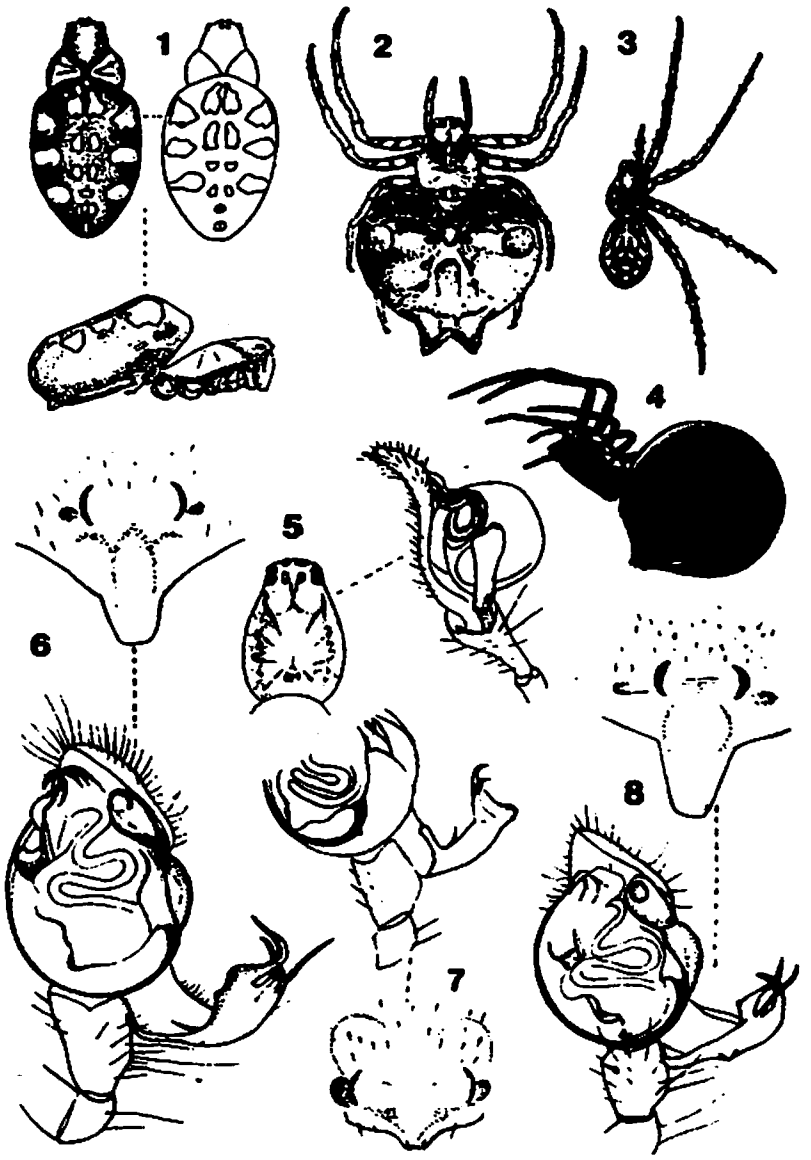


図 の 説 明

1. キマダラオニグモ（カラフトオニグモの色彩変異）*Zilla sachalinensis*　背面・側面
2. ムツトゲイセキグモ　*Ordgarius sexspinosus*
3. シノビグモ　*Clispius orientalis*
4. クロマルイソウロウグモ　*Spheropistha melanosana*
5. キヌアシナガグモ　*Tetragnatha lauta*　背甲・♂の触肢
6. シュウレイホラヒメグモ　*Nesticus shureiensis*　外雌器・♂の触肢
7. ヤマトホラヒメグモ　*Nesticus yamato*　♂の触肢・外雌器
8. スズカホラヒメグモ　*Nesticus suzuka*　外雌器・♂の触肢

クモ類への関心

千国安之輔

「クモに対する人々の関心や理解は、どの程度のものだろうか。」われわれ会員のように、常日頃クモに深い関心をもって、クモに取り組んでいるものたちは、会員や理解者を多くしたいと願う気持からも、ときどきこのようなことを考えることがある。

たまたま、昨年（1981年）「しのびぐも第9号」に掲載された、貝発憲治氏の「伊勢の生物展に参加して」や「残念な採集会」また、太田定浩氏の「秋の採集会」などの報文を拝読してみても、やはりそのようなお気持が同様に感じられる。

これは、たんに三重談話会のクモの研究会だけの実状ではないようである。全国各地の各会合などで開催される「自然観察会」や「採集会」などでの実状を見聞するにつけても、同様のようである。主催者側は、幾月も前から精魂込めて下調べをしたり、資料や展示物を準備したりして、至れり尽くせりの環境作りをして待っているにもかかわらず、さて、開会してみると、参加する人々の数が少なくてまことに淋しく残念なことが多いようである。人が多く参加しないでは事が始まらない。主催者や講師をがっかりさせることが、しばしばあると聞いている。この原因については、われわれは深く考えてみる必要があると思う。いま、ここで思いつくままに、その理由をあげてみると、次のようなことが考えられる。

(1). “クモ”と聞いただけで、無気味な動物だと頭からきめつけてしまう先入観があって、クモに親しみを持たない。

(2). クモはチョウやトンボのように美しくないと、きめつけてしまう。

(3). クモの生態の、ほんとうの面白さを、まだ知らないでいる。

(4). クモについて、親や教師の理解が乏しい、というよりは間違っている。

(5). クモについて、調べる手引書、図鑑などが、昆虫・鳥・魚などに比べて少ない。

などがあげられる。これらは、幼児や小・中学生、高校生など若い人たちに対する自然観察・研究の環境作りが誤っていることが、大きく影響しているように思われる。クモ類に親しませるというよりは、むしろ逃避させている親や教師や一般人に責任があるのではないだろうか。幼児から、クモを観察することは楽しいものであり興味深いものであるという雰囲気にひたらせ、環境を作ってやれば、自然にその方向に育っていくものであることを忘れているらしい。

わたしは、何年も前からこのようなことをいつも考えていたものだから、折

を見て子どもたちにクモの世界の素晴しさを紹介してやろうと、ひそかに念願していた。幸いに資料も整ってきたので、先年来「クモの親と子」「クモたちの狩り」などを刊行した。ありがたいことに、本誌第9号でも太田定浩氏会長が、その本を紹介してくださった。良い反響のあることをひそかに念願しながら感謝していた。

この本が子どもたちや教師や一般の人々に、どのように反響したであろうか。子どもたちはクモが好きになってくれたであろうかと、その反応を心待ちに期待していた。

まことにうれしいことに、たまたま昭和57年度全国青少年読書感想文コンクールで、この本を読んだ小学生の感想文がみごとに入賞した。

小学生にクモの世界を紹介すれば、どのような反響があるかを知るために良い具体例なので、その作品を原文のまま次に掲載して会員に知ってもらい、今後の指針に役立ててほしいと念願する次第である。

昭和57年青少年読書感想文コンクール入賞作品

32 「クモたちの狩り」を読んで

一戸町立奥中山小学校中山分校
六年　山火行政

この本を読むまでは、ぼくの頭は、昆虫の王者、「カブト虫」のとりこになっていた。あのてかてかと黒びかりする色、王者らしいかっこうよさ、強さ、どれをとっても、ぼくにとってはたまらない魅力ある昆虫だった。

それが、クモとなると、自分の家のまわりや、あたりの野山、それに学校の廊下や、便所など、いたる所で、クモの網や、クモの卵などを見ていながら、今まで、なんの興味ももたなかった生き物だった。

ところが、「クモたちの狩り」を読んでからは、ぼくの、クモやクモの網を見る目がかわってきた。

クモたちの網造りの妙技や、その網の美しさや形のおもしろさ、それに、獲物をとるための知恵や、食べ方、じょうの網にかからないひみつなど、どれをとっても、ぼくには驚きだった。網の美しさでは、なんといっても、ジロウグモの風ていの形のレース網だった。もう一つは、ぼくたち北国の人たちには、見る事のできない、メッシュの網目をした、スズミグモのドーム網だった。ヒラタグモのタコ足状網にも驚かされた。タコ足状網は、獲物をとるためのみごとな信号糸を持っていた。この信号糸は、たいていの網にあり、これが獲物をとる大切な仕組みであった。ぼくは、このような網の仕組みにすっかり心をうばわれてしまった。しかし、本を読んで驚いてばかりいられないと思ったぼくは、クモの網造りをどうしても観察してやろうと決心した。クモは、夕方から夜に網をはることを知ったぼくは、クモがよく網をはっている、自分の家の後に行ってみた。「いたいた、しめた」と思ったぼくは、このクモの網造りの観察を始めた。少し見ていたら、母がきて、「何やってりゃ」と言った。ぼくは、「クモが、今網造ってるから、見でら」と言ったら、母も、ぼくと一緒に網造りを見ていた。「このクモ、何というクモだべ」と母に聞いたら、「オニグモなんだ」と答えた。ぼくは、中学校にも入っていない母の言うことだから、(本当かな)と思って、家に入って図鑑で調べたら、確かにオニグモらしかった。外に出たぼくは、又観察を始めた。クモが網造りを始めたのがだいたい五時二十五分頃で、終わったのが六時五分頃だった。だいたい四十分位で一つの網がはれるんだなあと思った。よく見ていたら、後足の二本が、網造りの時の大事な働きをしていた。(同じ足でも、後足は、網造りの役目をする足だとすると、残りは六本で、カブト虫や、クワガタの仲間になるんだ)と、自分かってに考えながら網造りの妙技に見とれていると、とても楽しい時間だった。

この本を読み終わったぼくは、クモの奇妙で複雑な生活の仕方を、いろいろと知って感嘆したが、それと同時に、「よし、ぼくも、これから、クモの観察をやってやろう」という気持ちがむくむくとわいてきた。校舎の廊下には、今もクモが卵を産んでいる。観察のチャンスはいくらでもあるとぼくは思った。

千国安之輔「クモたちの狩り(上)―網をはるくも」(偕成社)

小高2頁32の1

最近の活動内容から

松　本　誠　治

「しのびぐも」第10号に拙文の掲載をお許し戴き、うれしく思います。「しのびぐも」の第2号から第5号そして第7号に、クモと付合っていてでてきたモヤモヤとした感情や、模索中の活動方法などを載せてもらい感謝しております。今回も前例に従がい“モヤモヤ”を書き連らねることを許してもらいたいと、厚かましくも思ったのですが、“モヤモヤ”は、書き連ねる程には明確になっておらず恥かしく思っています。

現在活動中の内容の一つに、東京都武蔵野市にある都立井ノ頭公園のクモ相調査があります。5年程前からクモと環境との関係について興味を抱きはじめ、街路樹上のクモ類を調べたりしていますが、地元であることからも井ノ頭公園のクモ相調査は、いずれとりあげてみたいテーマでした。幸い、昨年9月に本学1年生の吉田昌君がクモを調べてみたいと来室したのを機会に、一緒に井ノ頭公園の調査を始め、月1回の採集をしています。いずれとりあげてみたいテーマといったのは、昭和14年から15年にかけて新興理科研究会の生物相調査の対象地となり、クモ類は植村利夫博士が1940年にActa arachnologica に88種を発表され、その後萱嶋泉博士も1966年に「三多摩地方の蜘蛛の研究（東京都）」で井ノ頭公園で採集したクモを発表されており、同一地域でのクモ相の変化をみるのに格好の場所と考えたからです。40余年前の井ノ頭公園およびその付近の状態が現在とどれ程異っていたか是非知りたく、市史や地形図等に当ってみるつもりでいます。吉田君と共に採集したクモをみていると、以前の記録にはない種類もいくつかみられ、その理由を考えることもおもしろいのですが、一番の問題は、記録にあって採集されない種の取扱いと考えています。本当にいなくなったのか、いるのに採集できないのか。これを結論するには、詳しい調査と勇気がいることと思います。調査スケジュールとして、1年目は出来るだけ多くの種類を採集し、以前の記録と比較すること、2年目は以前の記録にあって採集されていない種類の発見に努めることの最短2年掛りの調査を考えていますが、何年掛りの調査になるかわかりません。「とにかくやってみよう。」と吉田君と話しています。

(1983・2・28)

南島町にてムツトゲイセキグモを採る

貝　発　憲　治

昨年の7月に、南島町東宮にて、鳥羽高校と南島高校の生物部が合同で2泊3日の臨海実習を行った。私は顧問として同行したのであるが、あいにく、例の長崎豪雨の日に当ってしまい、2日間は、室内での発生実験等でお茶を濁すしか手がなく、野外での大きな活動は全くできずに、さんざんな臨海実習となってしまった。しかし、幸運はどこに待っているかわからないものだ。最後の3日目は、どうにか雨だけはあがったので、海での実習はあきらめ、思いきって河内谷へ動植物採集にでかけてみた。もちろん、水分をたっぷりと含んだ木木の状態では、採集物も少ししかなかったが、その帰り道で、アカメガシワの葉裏にいるムツトゲイセキグモを発見したのである。はじめはマメイタイセキグモのように見えたので、「ああ、またここにもいたな。」という程度にしか思わなかった（私は、最近、尾鷲市と志摩半島で2回マメイタイセキグモを採集している。）が、生徒に見せるため、管瓶に入れてよく見たところ、どうも腹部の突起が少ない。ルーペでよく見ると、頭胸部に明らかな突起がいくつか見え、まぎれもなくムツトゲイセキグモであった。全員で観察をした後、最後に大きな収獲物があったと万歳を三唱して、大喜びで南島を後にした。この臨海実習を通して、本当に大変なお世話をして下さった、南島高校生物部顧問の奥埜清道先生ならびに奥様に、この紙面をかりてお礼申し上げます。

さて、家へ持ち帰った後は、捕虫動作にも興味があったので、さっそくアカメガシワの枝先と餌とするショウジョウバエや小昆虫を、直径20cmほどの大きめの標本瓶に入れ、生態観察をすることにした。1日目はじっと葉裏にとまったままであったが、2日目には5cm四方ほどの不規則網を張り、これから2cmほど糸を垂らしてぶら下がっていた。ひょっとしたら、投げ縄動作が見られるかもしれないと思い、それから3日間ほどは注意深く観察を行った。しかし、残念ながら、その後はずっとこのような状態が続いただけであった。そこで、もう少し大きな飼育箱に移し、何とか餌も与えようといろいろ試してはみたが、結局これもうまくいかなかった。とにかく、8月末の東亜蜘蛛学会の大会には生きた状態で持参し、専門の方にお渡ししようと思いながら観察を続けた。ところが、8月11日に出張をした日に、都合悪く家内も外出をし、一日中家が締っぱなしになってしまった。帰宅後、飼育箱を見るとクモがいない。よく見ると底に脚を縮めてひっくりかえっていた。驚いてとり出し、脚などに触れてみたが、時すでに遅く暑さのために死んでしまっていた。結局、一つもま

ともな生態観察ができないままに死なせてしまったのである。しかたなくアルコールに入れて標本にしたが、残念で残念でその後しばらくはため息ばかりついていた。もう少し何とかならなかったものか、専門の方に生きた状態でお渡しできなかったものかと悔まれてしかたなかった。もしも万が一、もう一度採集できる機会があったなら、今度はもう少し何とかよい観察をしてみようと思う。

正式な採集記録は次のようである。

採集年月日	昭和57年7 月25日
採集地	度会郡南島町河内、河内谷〔3630－3418〕
	アカメガシワの葉裏（地上2m10cm）にいた。
	雌、幼　体（体長5.1mm）

三重クモ談話会発会式の記念写真より

神島のクモ

貝発憲治

神島は、伊勢湾口に浮かぶ面積0．8 kmほどの小島で、三島由起夫の小説で一躍有名になった島である。この島からは、私の勤務校である鳥羽高校へ、多くの生徒が通学しているが、定期船で一時間以上もかかるため、こちら側から島へ渡ることはめったにない。私も、一度行ってみたいと思いながら、ついぞ、渡らずじまいに終っていたが、この夏休みに、神島で一泊二日の会合が開かれ、偶然出席する機会を得た。そこで、これを利用し、さらにもう一泊してクモの採集を行うことにした。二日目は、島の南西側、三日目は、八代神社から観的所までのコースを歩いた。ハマヒサカキ、シャシャンボ、モチツツジ、シャリンバイ、ハマオモト等の植物も見られたが、一見して、ウバメガシ、クロマツを中心とするきわめて単純な植生であり、期日も八月末であったためか、予想外に採集個体数は少なく、三分の一近くが幼体であった。

期待したほどの採集はできなかったが、今後の参考資料として、種まで判定しえたもののリストをここに掲げることにする。

Ⅰ．Uloboridae　ウズグモ科

1．*Uloborus varians* BOSENBERG et STRAND　ウズグモ

Ⅱ．Oonopidae　タマゴグモ科

2．*Ischnothyreus narutomii* (NAKATSUDI)　ナルトミダニグモ

Ⅲ．Theridiidae　ヒメグモ科

3．*Achaearanea tepidariorum* (C. KOCH)　オオヒメグモ

4．*Anelosimus crassipes* (BOS. et STR.)　アシブトヒメグモ

5．*Dipoena castrata* BOS. et STR.　ボカシミジングモ

6．*D. mustelina* (SIMON)　カニミジングモ

7．*Enoplognatha transversifoveata* (BOS. et STR.)　カレハヒメグモ

8．*Theridion japonicum* BOS. et STR.　ヒメグモ

9．*T. sterninotatum* BOS. et STR.　ムナボシヒメグモ

Ⅳ．Linyphiidae　サラグモ科

10．*Meioneta obliqua* OI　ナナメケシグモ

11．*M. projecta* OI　ツノケシグモ

Ⅴ．Erigonidae　コサラグモ科

12．*Diplocephaloides saganus* (BOS. et STR.)　ハラジロムナキグモ

Ⅵ．Mimetidae　センショウグモ科

13．*Ero japonica* BOS. et STR.　センショウグモ

14．*Mimetus japonicus* UYEMURA　ハラビロセンショウグモ

昭和57年度決算報告

収入の部	83,583円	
前年度繰越金	47,383	
会　費	27,000	(1,000×26. 500×2)
機関誌売上	9,200	

支出の部	25,140円
機関誌第9号製本代	10,000
機関誌第9号郵送代	5,040
機関誌第9号紙代（追加分）	3,600
機関誌第10号紙代	4,200
通信・事務費	4,900

残　高	55,843円

昭和57年3月31日

上記の通り相違ありません。

会　計　　貝　発　憲　治

会費領収（敬称略）

（昭和53年度）直居通泰　（昭和54年度）直居通泰　（昭和55年度）直居通泰．新海栄一　（昭和56年度）直居通泰．新海栄一．松本誠治．市橋　甫．（昭和57年度）山川要助．貝発憲治．孫福　正．直居通泰．川辺良一．熊田憲一．西川喜朗．松本誠治．市橋　甫．新海栄一．大川親雄．須賀瑛文．坂部元宏　（昭和58年度）熊田憲一．西川喜朗．松本誠治．千国安之輔．大川親雄．小沢実樹．坂部元宏

会費納入について

未納の方は、至急御送金下さい。原則として前納でお願いします。

（昭和53年度までは500円、昭和54年度以後は1,000円です。）

郵便振替　　名古屋　8－3895

しのびぐも総目録　　第1号～第10号　(1973～1982)

先はどうなることやらと心配された「しのびぐも」も、第10号までこぎ着けることができました。これも、会員の皆様方の御協力と地道な活動のたまものであると思います。三重クモ談話会の活動内容を知っていただくために、また文献探索に利用していただくために、ここに、今までの総目録を掲げることにいたします。活用していただければ幸いです。

なお、バックナンバー御希望の方は、一部700円（送料含）ですので、事務局までお申し込み下さい。

第1号　(1973)

「しのびぐも」発刊によせて ---------- 太田　定浩　1
クモを使った二・三の実験 ---------- 水谷　慶治　3
いろいろな棲息場所における真生クモ群集 -------- 貝発　憲治　7
昭和48年度事業報告 ---------- 17
三重クモ談話会規約 ---------- 21
会員名簿 ---------- 22
昭和48年度決算報谷 ---------- 23

第2号　(1974)

伊勢神宮の珍蜘蛛キノボリトタテグモと
キシノウエトタテグモについて ---------- 孫福　正　1
アリグモ等の擬態について ---------- 松本　誠治　4
蜘蛛あれこれ ---------- 水谷　慶治　6
NHK番組制作に協力して ---------- 橋本　理市　10
三重県南部地方の真生蜘蛛類目録（追加）-------- 貝発　憲治　12
東亜蜘蛛学会第7回全国大会、三重県にて
開催決定 ---------- 18
会員名簿 ---------- 19
昭和49年度決算報告 ---------- 20

第3号　(1975)

クモ外雌器に見られる付着物について ---------- 松本　誠治　1
三重県下のキシノウエトタテグモ・キノボリ
トタテグモ及びワスレナグモの分布について ------- 孫福　正　3
南島町における真正クモ類目録（第一報）-------- 南島　高校
生物クラブ　5

東亜蜘蛛学会第7回大会を津市で開催して ------- 太田　定浩　9
会員名簿 ---------- 11
昭和50年度決算報告 ---------- 12

第 4 号　(1976)

日本の稀産ハエトリグモについて ---------- 松本　誠治　1
三重県下のトゲオオザトウムシについて -------- 孫福　正　5
東海地方のクモ相雪見 ---------- 門脇　千浪
本庄　四郎　7
津市およびその周辺のクモ相 ---------- 貝発　憲治　19
昭和51年度事業報告 ---------- 32
お知らせ ---------- 33
昭和51年度決算報告 ---------- 34
会員名簿 ---------- 35

第 5 号　(1977)

分類学研究におけるカードシステムの利用 ------- 松本　誠治　1
ミズグモ騒動 ---------- 6
みんなの科学「網をはらないクモ」の制作に参加して ---------- 橋本　理市　7
チリイソウロウグモ、スズミグモを襲う！ ------- 貝発　憲治　9
鈴鹿山系北部の真正蜘蛛類 (1) ---------- 橋本　理市
貝発　憲治
太田　定浩　11
単眼欠如のクモ ---------- 貝発　憲治　21
談話会図書 ---------- 22
昭和52年度決算報告 ---------- 24
会員名簿 ---------- 25

第 6 号　(1978)

千国先生とシノビグモ ---------- 太田　定浩　1
鈴鹿山系北部の真正蜘蛛類 (2) ---------- 橋本　理市
貝発　憲治
太田　定浩　5
私のクモ採集記録より ---------- 貝発　憲治　9
お知らせ ---------- 18
談話会図書 ---------- 19

編集後記

記念の第１０号ですので、御無理を申し上げ、八木沼先生をはじめ県外の千国、松本、須賀氏からも、貴重な報文やお祝いの言葉をお寄せいただきました。お忙しい中、本当にありがとうございました。相変わらずの粗末な手刷りの機関誌で申し訳ありませんが、お許し下さい。

三重クモ談話会が発足してから、早や十年がたち、会員も28名になりましたが、三重県内の実動研究者が少なく採集会等のいろいろの行事が今一つ盛り上がらない、若手の入会が全くない、研究内容が深まらない、等問題点も多くかかえています。十年を一つの節目として、さらに大きく前進していきたいと思います。会員の皆様の御活躍と多くの御投稿を期待します。

しのびぐも　第１０号　１９８２

昭和５８年５月　５日　印刷
昭和５８年５月１５日　発行
編集者　太田定浩　橋本理市　貝発憲治
発行者　太田定浩
発行所　三重クモ談話会
〒517　三重県鳥羽市安楽島町村山1459
三重県立鳥羽高等学校内
☎　(０５９９)２５－２９３５